臨床検査技師による小児検体採取の有用性

◎児玉 由紀子[1)]、梶 勝史[1)]、吉田 賢二郎[1)]、曽我部 光洋[1)]、秦 由紀美[1)]、山ケ城 学[1)]、中口 駿[1)]、渡邉 香緒里[1)]
社会医療法人 真美会 大阪旭こども病院[1)]

【はじめに】当院は小児内科専門病院で、外来での迅速検査検体は今まで全て看護師が処置室で採取し、その後検査室に運んでいた。当院には8名の臨床検査技師がおり、2018年から技師が検査室で一部の検体採取開始をしたので、今回その有用性を検討した。

【対象と方法】技師による採取開始前2015年4月から2018年3月の3年間と、開始後2018年4月から2021年3月の3年間での看護師と技師による検体採取件数、検査経過時間などの比較検討を行った。迅速検査の種類は、鼻汁検査がインフルエンザ・RS・ヒトメタニューモ・アデノ、咽頭ぬぐい液検査はアデノ・溶連菌である。

【結果】総検査件数は2015年度11,240件、2016年度13,603件、2017年度14,859件、2018年度17,642件、2019年度20,456件、2020年度7,433件であった。検査室での採取率は2018年度13.1%、2019年度13.7%、2020年度12.5%であった。2018年度から2020年度の3年間の平均陽性率は処置室17.2%、検査室15.4%であった。平均経過時間の最長と最短は開始前では37分と26分、開始後では33分と22分であった。

【考察・まとめ】

COVID19が流行した2020年には当院の患者数は激減し、それに伴い検査数も減少している。検査室での採取率は3年間とも13%前後であった。陽性率は有意差が認められず手技による差はないと思われる。しかし実施する前より後の方が検査経過時間は少し短くなっていた。検査室で実施することにより患者の待ち時間短縮と看護師の負担軽減につながったといえる。今後は検査室での検体採取の機会を増やすため、役割分担の取り決めの再協議が必要である。当院では鼻汁吸引液採取や咽頭ぬぐい液採取は検査室でも母親の膝に抱えられた状態で実施している。患児は母親と離されることなく安心した状態で検査を受けることができていると思われる。臨床検査技師が検体採取を行うことは他職種の業務負担軽減、患者の負担軽減につながっており、有用であると考える。

連絡先：(06)6952-4771